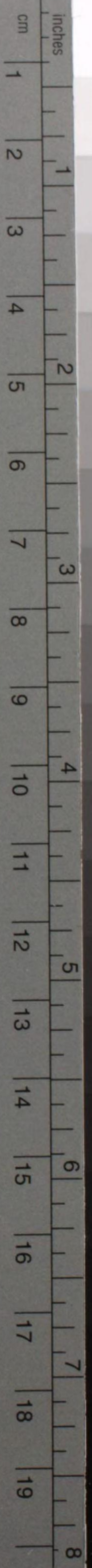


# Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19



# Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue	Cyan	Green	Yellow	Red	Magenta	White	3/Color	Black
1	2	3	4	5	6	7	8	9
10	11	12	13	14	15	16	17	18
19	20	21	22	23	24	25	26	27

善本寫真集三

# 古 俳 書 一

天理圖書館

026-Te147z



\*00339698 \*

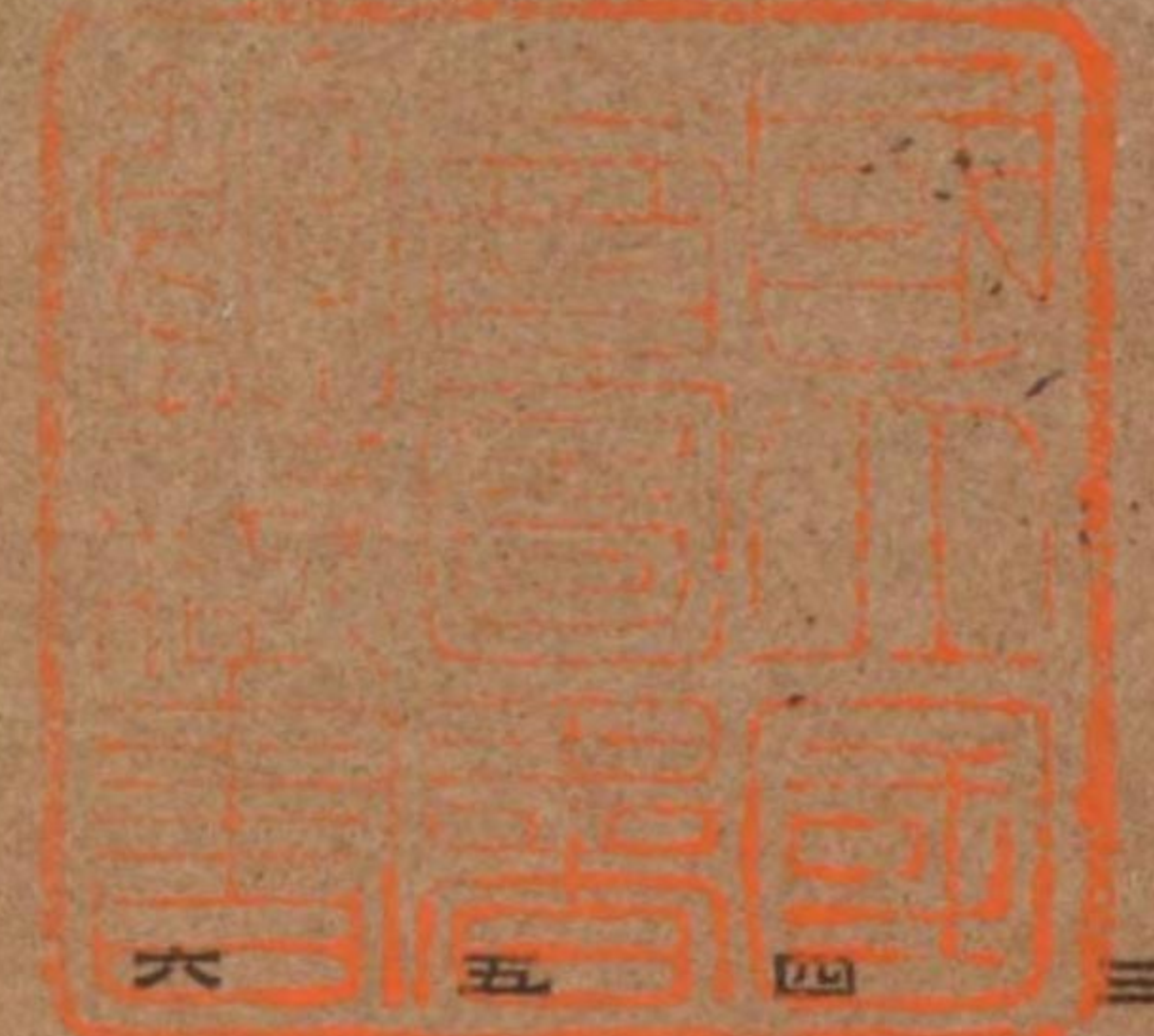


026. Te147z

天理圖書館綿屋文庫は連歌・俳諧・雑俳の特殊文庫である。先づこゝに、連歌・雑俳を除き、架藏俳書中所謂元祿期以前の、俳諧史上著名のものを選んだ。

目次

一	新撰犬筑波集	山崎宗鑑	九	誹諧獨吟一日千句	井原西鶴
二	守武千句草案	荒木田守武	一〇	俳諧蒙求西翁流	岡西惟中
三	犬子集	松江重頼	二	江戸誹諧談林十百歌	田代松意
四	伊勢山田俳諧集	利清望一・孝晴	三	誹諧中庸姿	菅谷高政
五	俳諧御傘	松永貞徳	三	誹諧東日記	池西言水
六	立圃俳諧繪卷	野々口立圃	四	梅翁歌仙之誹諧	西山宗因
七	百五拾番俳諧發句合	北村季吟	五	俳諧百韻繪卷	井原西鶴
八	寶藏	山岡元隣			



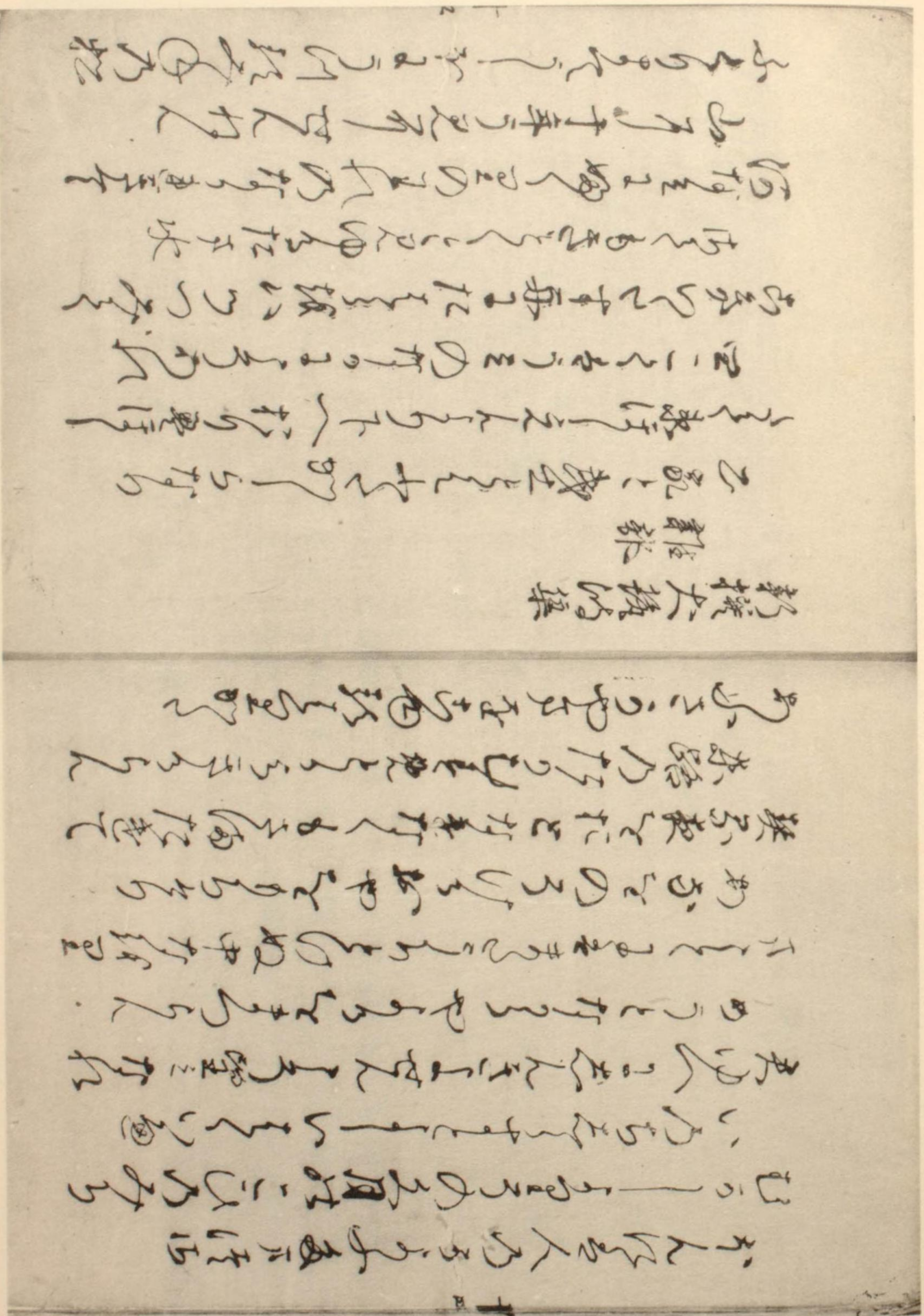
339698



一新撰犬筑波集

撰者は室町末期洛外山崎の住宗鑑法師。志那氏、彌三郎範重、近江源氏佐佐木の一族ともいふ。従来多分に傳説中の人物であるが、その自筆と傳へるもの間々あり、筆道に於て宗鑑流の祖と稱せられる。文學史上、近世江戸時代の俳諧に對し、前期室町時代に連歌を擧げるを常とはするが、時にあつて俳諧がなかつた譯ではない。本集はその代表的撰集で、後々この道の淵源とされてゐる。書名の筑波とは連歌を、犬は俳諧的との寓意であるが、古くは誹諧連歌抄ともある。その庶民的性格の故に博く愛好された状は、近世初頭既に數種の異版を以て印刷流布した事によつても略々知られよう。

掲出本は慶長年中刊古活字十行本。袋綴、一冊。縦二六・五糎、横一九・五糎、三七丁。流動殆ど定まる所のなかつた犬筑波に一つの定形を與へ、又新に興起する俳諧に影響する所頗る多かつた。





守武千句草案

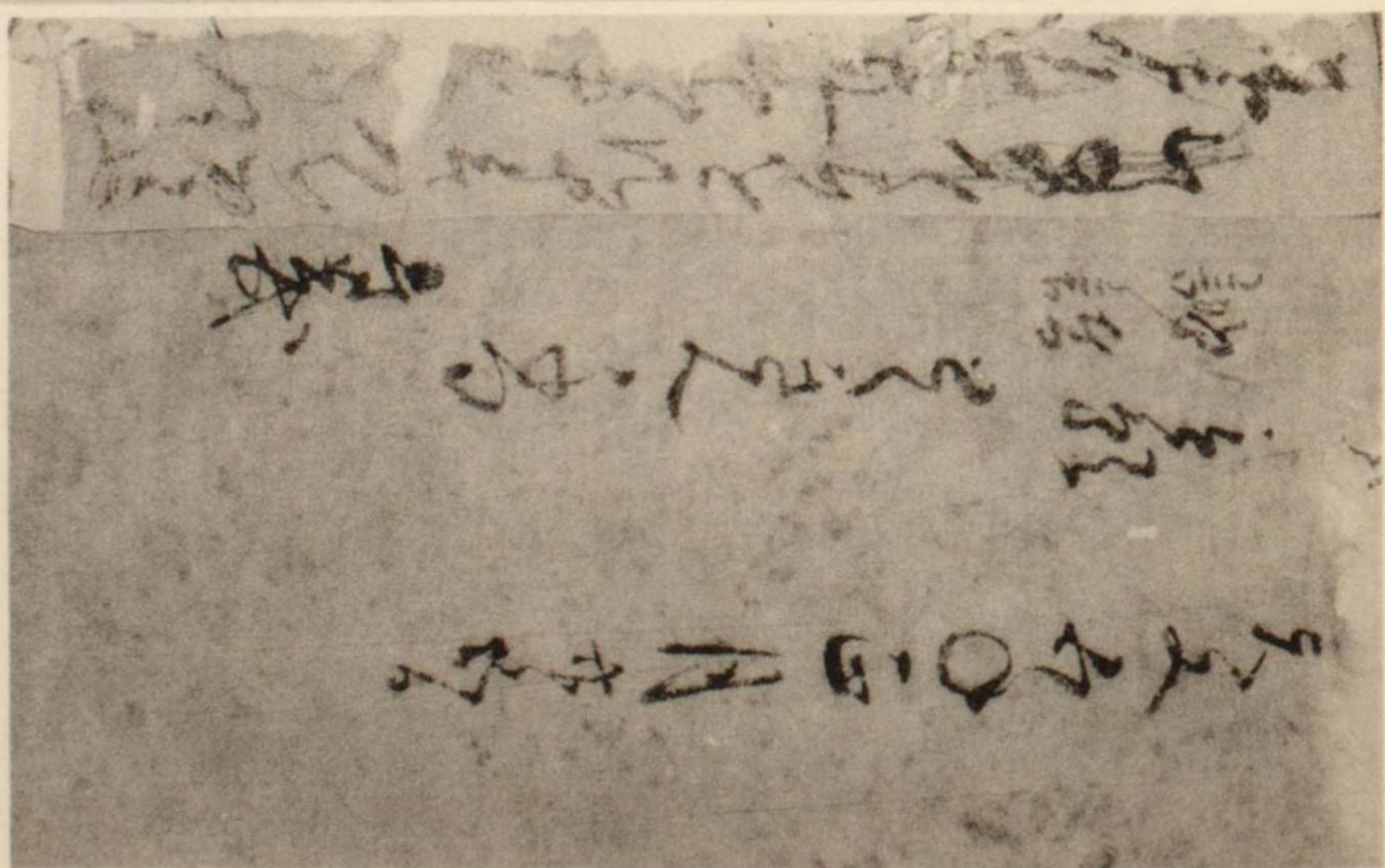
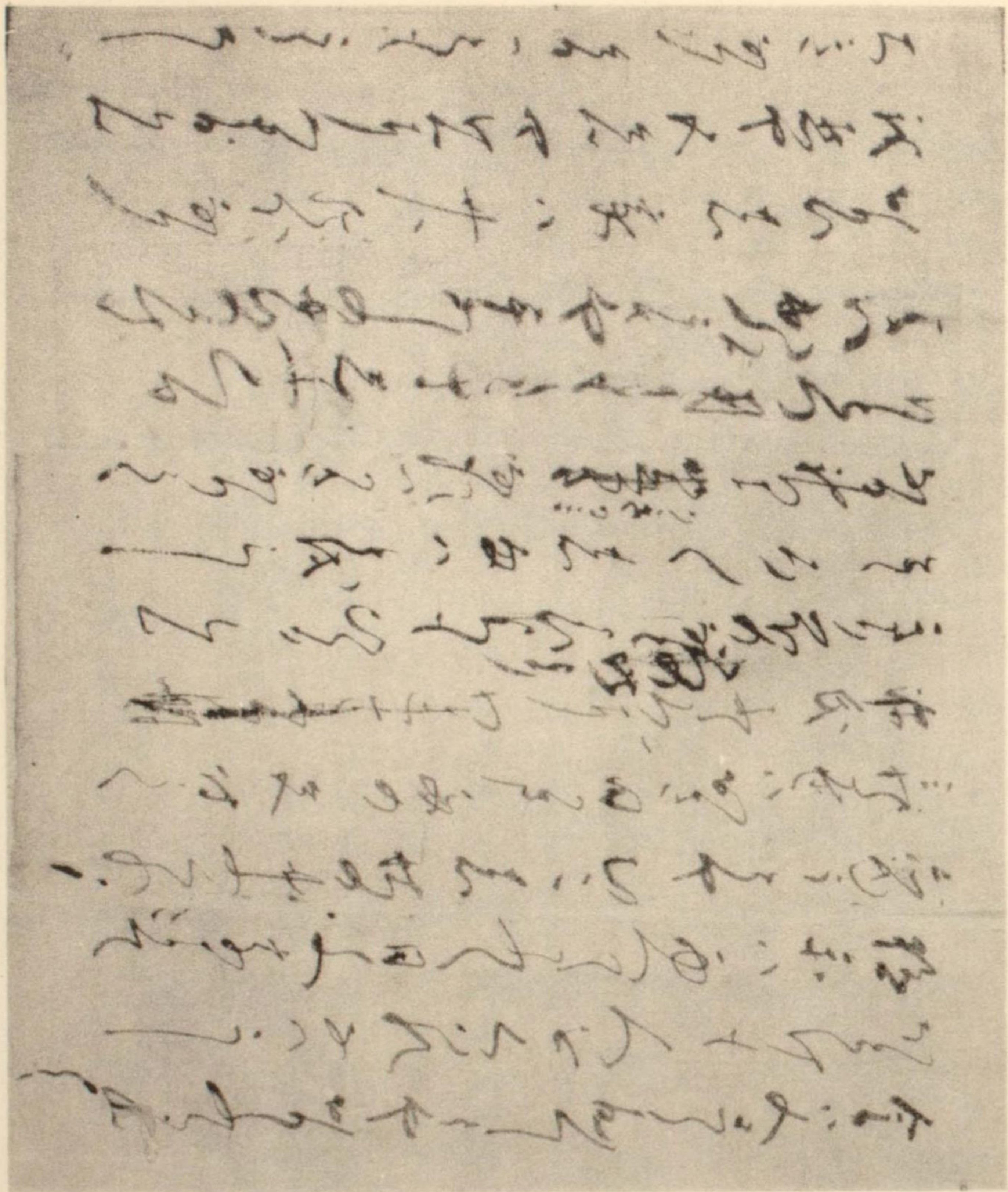
守武(文明五年—天文八年) 荒木田氏、伊勢内宮の長官。連歌に長じ、時に俳諧に遊んで、その有名のものに誹諧之連歌獨吟千句、所謂守武千句、一名飛梅千句があり、從來天文九年成立の自筆本、又はその系統の慶安五年刊本を以て流布する。

掲出本は自筆。改装一冊、縦一五糎、横一九・五糎、四〇丁。現状全く原装の態を失ひ、残存の斷簡を袋綴の冊子に任意貼り交ぜたもので、句數は、原の約半ばを保つに過ぎない。原表紙に

天文五年正月廿五日

立願 誹諧 とくきん千句 守武

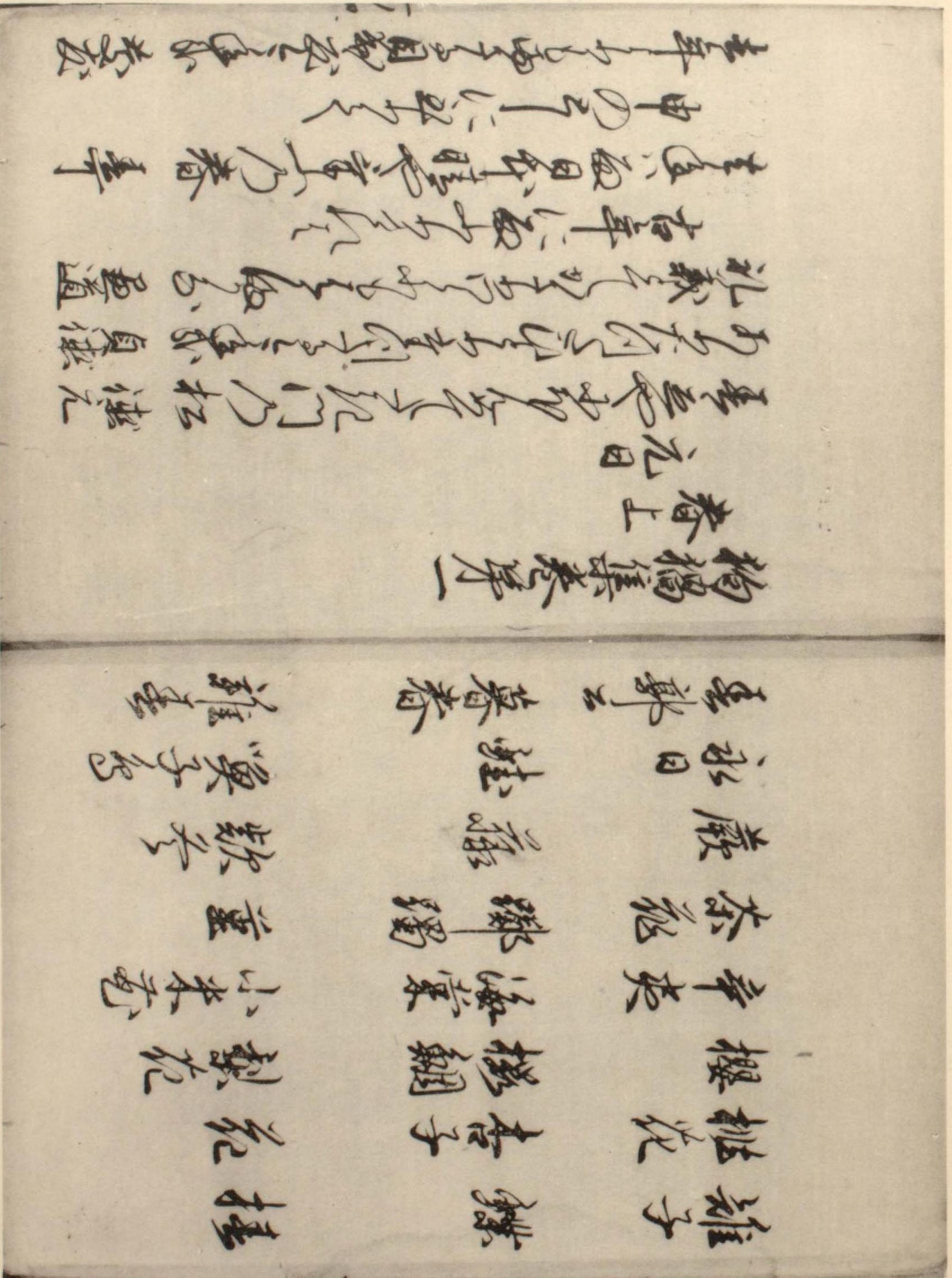
と自署する。即ち通行本が天文九年の精撰定稿本たるに對し、本書は天文五年の初稿草案本であつて、各句訂正改竄、鏤骨推敲の迹を縦横にとゞめてゐる。





三 犬 子 集

重頼（慶長一七年—延寶八年）松江氏、俳名維舟、俗に大文字屋治右衛門、別に江翁と號した。野々口立圃に竝んで松永貞徳門の最高足。近世に及んで擡頭した俳壇は、次第に王城の地京都、貞徳を中心に結集した。犬子集はその第一次作品集である。寛永八年着手、同十年成り、同年刊。重頼の自序によれば、或古老の披見に入れたとのみあつてその名を明記せぬが、勿論師貞徳をさすといふ。故に正しくは、貞徳點、重頼編とあるべきものであらう。俳書出版の権輿は慶長古活字本新撰犬筑波集とはされてゐるが、それは當時謂はゞ既に古典化したものの翻刻とも稱すべく、嚴密には犬子集を以てその嚆矢としなければならぬ。後年版式を横本に改めた數種のもの併せて頗る流行した。掲出本は袋綴、五卷五冊。縦二九糎、横二〇・五糎。縹色行成表紙大本形式の装幀は、その寛濶な板下筆蹟と相俟つてよくこの期の風趣を示してゐる。刊記、寺町二条二町上 大炊道場 存故開板。



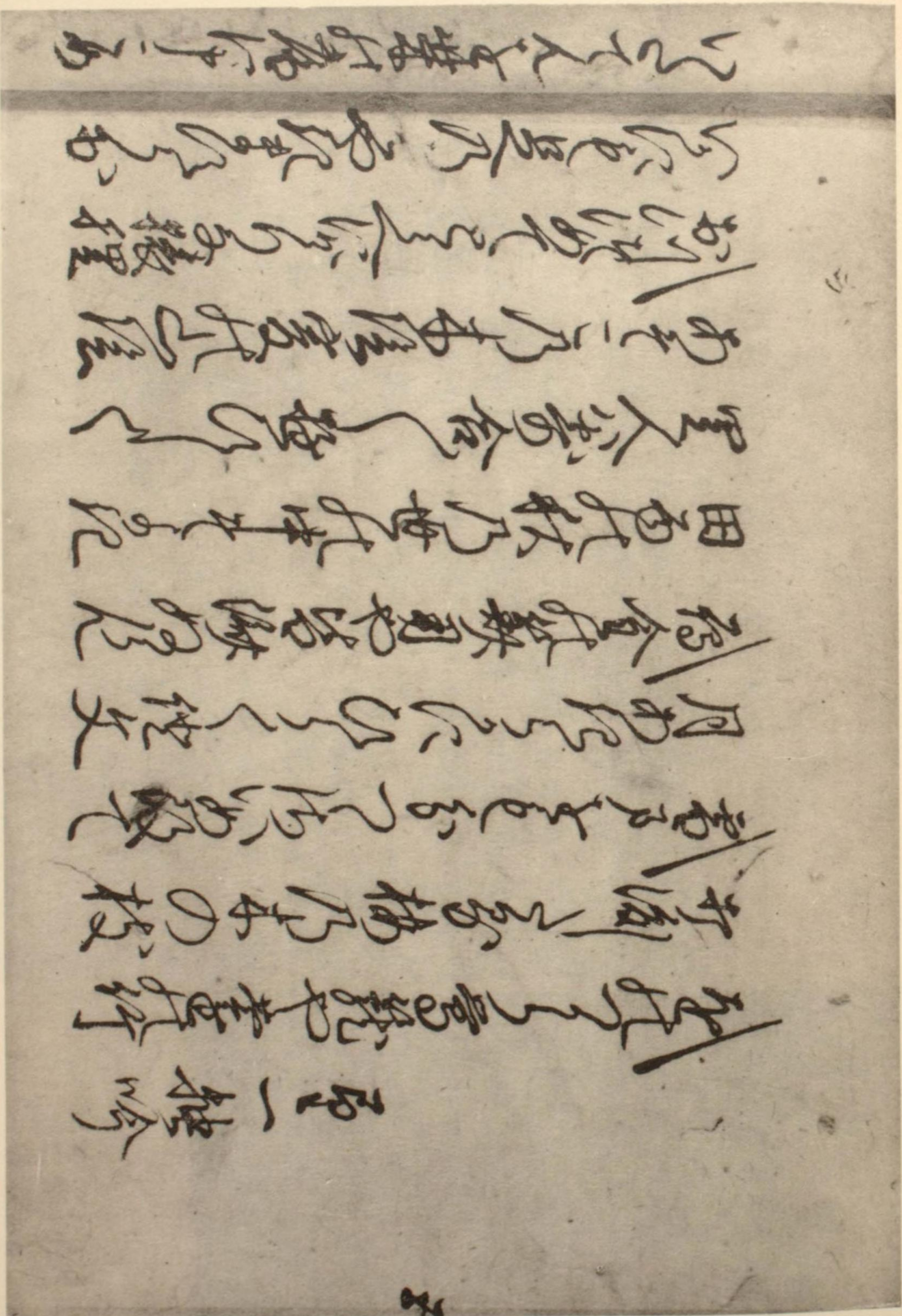


四 伊勢山田俳諧集

利清、望一、孝晴共撰。孰れも近世初期伊勢の人、各々その傳を詳しくしない。

由來伊勢は大神宮鎮座の所、我が國文化の一淵藪であつたが、同じく事は俳諧にも通ずる。伊勢の俳諧は守武の昔より、近世末に及んで絶える事なく、据然たる勢力を示し續けた。本書、漸く守武風より貞徳風に遷らんとする頃、伊勢山田衆の好尚を知るに足る。

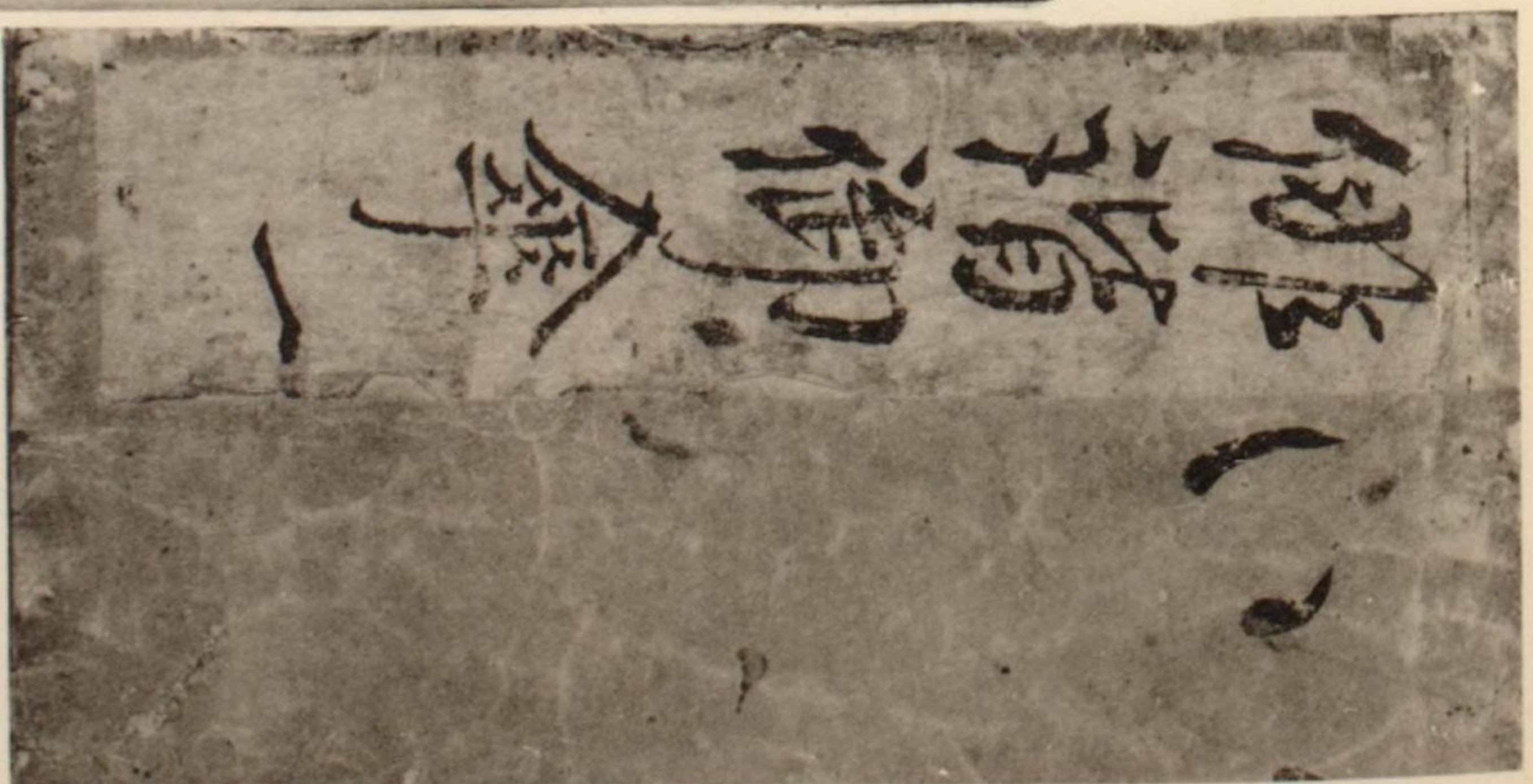
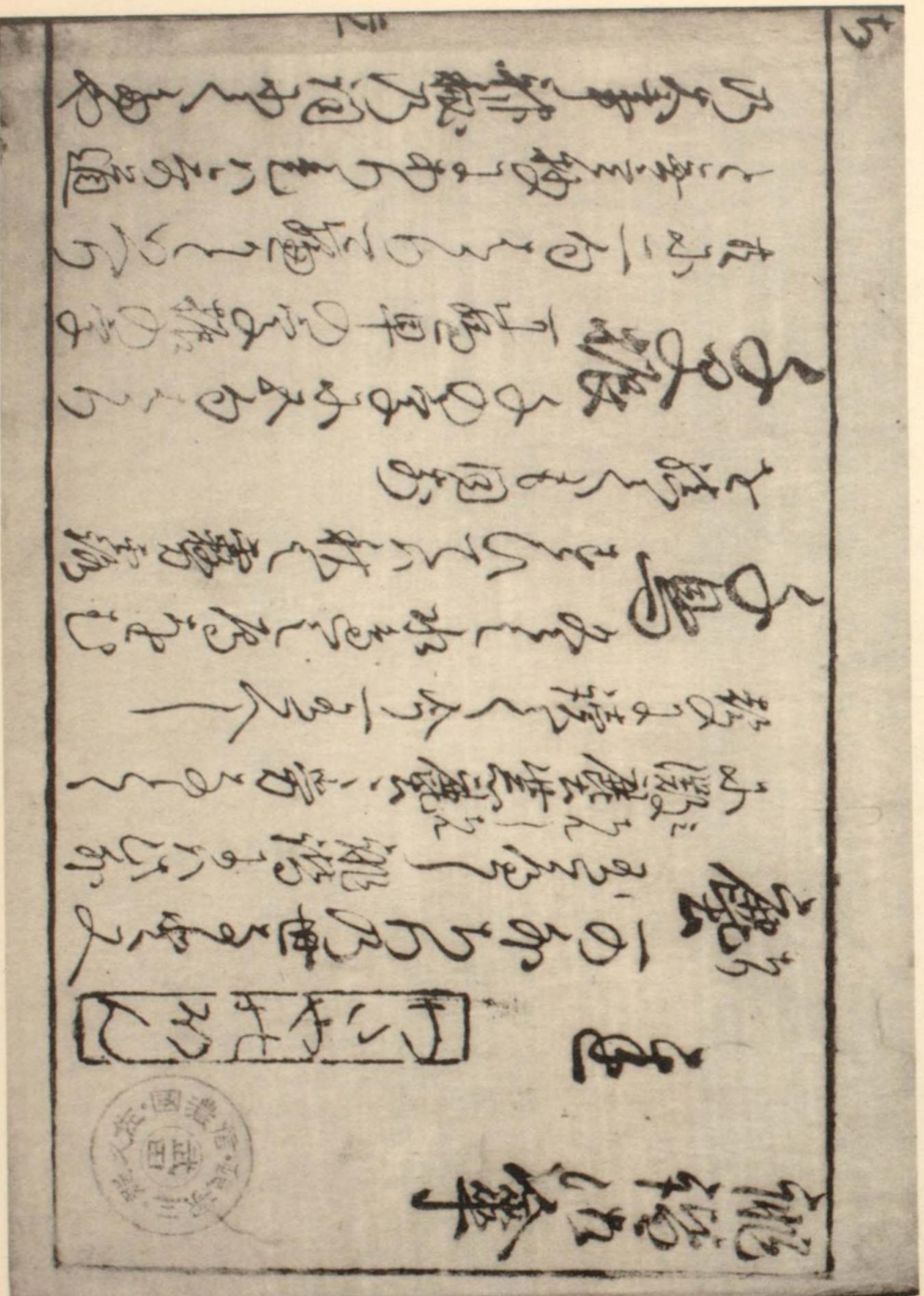
掲出本は袋綴、二冊。縦一三・五糎、横二〇・五糎。上卷、利清獨吟・利清點望一獨吟・利清望一兩點孝晴獨吟及び利清點寄合百韻、下卷、長帳拔書を收む。刊記、於伊勢山田八日市開板 慶安三年仲春吉日。俳書の地方版として最も早い事例である。寫眞の望一獨吟は百韻にして、奥書點附に、付墨四拾五内長四句 利清點。





五 俳諧御傘

貞徳(元龜二年—承應二年)松永氏、逍遊軒、長頭丸、延陀丸、又明心居士等。和學に秀で、和歌連歌狂歌にも巧で、近世初頭文壇の啓蒙的指導的地位にあり、特に俳諧中興の祖としてその一派を貞門といふ。先行の連歌新式に據つて俳諧式目の制定を志し、早く寛永二〇年、その著油糟に於て十首の式目歌を掲げ、俳諧の大綱はこゝに定まつた。更にこれを詳述して御傘を著はす。書名は相傘でさせぬ「うへさまのおからかさ」即ち「此一本有ならばあめが下に」俳諧の指合なしとの洒落である。音讀してゴサン、或はギヨサン、時にオカラカサとも訓む。掲出本は袋綴、一〇冊。縦一四・五糎、横二〇・五糎。丹色行成表紙。自序。題簽、俳諧御傘。内題、誹諧御傘。刊記、慶安四曆初秋 三條通菱屋町 林甚右衛門板。なほ、萬治二年以降數次の再刷があり、俳學の式法として永く斯界に行はれた。

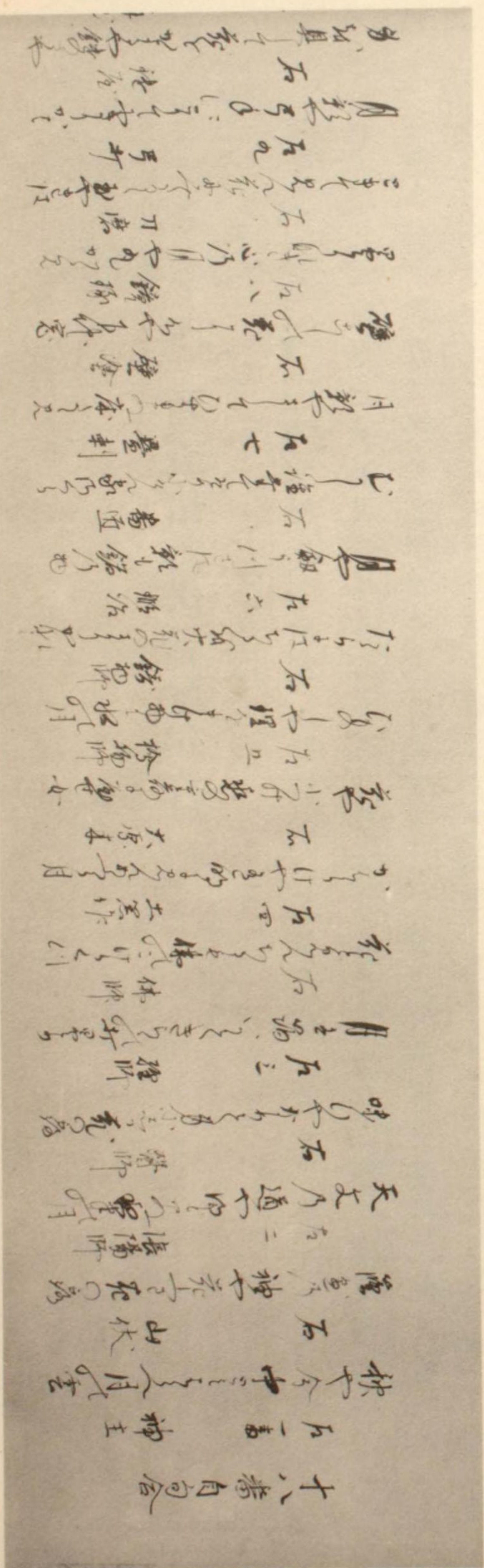




六 立圃俳諧繪卷

立圃(文祿四年—寛文九年—一五九五—一六六九)野々口氏、名は親重、松翁と號す。俗稱紅屋庄右衛門、又は市兵衛等。家業に因んで雛屋とも呼ぶ。俳諧に於て貞徳門の長老。維舟松江重頼と撰集の先功を争ひ、かの犬子集に對し同年誹諧發句帳を世に問ひ、爾來一派を建て、他門に交流する事が尠かつた。書を尊朝法親王、畫を狩野探幽に受けたといひ、技頗る世に迎へられ、又文章に巧みで、源氏物語の梗概書十帖源氏等がある。省筆略體の繪様、諧謔流俗の行文はやがて俳畫、俳文の一流流ともなつた。

掲出本は自畫、自筆。彩色。絹地、卷子本、三卷。縦二九糎、長丈各卷概ね十餘米。收める所、相互に脈絡なく、その得意とした文章、及びそれに應じた繪柄を數多く集めたに過ぎぬ。執筆は晩年のものか。





七 百五拾番俳諧發句合

季吟(寛永元年—寶永二年 一六二四—一七〇五)北村氏、慮菴、拾穗軒、又湖月亭と號す。近江の人、後上洛して俳諧を貞室及びその師貞徳に學ぶ。むしろ古典の學に特に著名であるが、俳諧に於ては伊賀の俳壇を指導し、芭蕉の初學を啓發したといふ。後年江戸に出で和學を以て幕府に仕へた。

掲出本は自筆。粘葉裝、二冊。縦一六糎、横一八糎。左方、岩城住松岡風鈴軒以下一五名、右方、大坂住伊勢村意朔以下一五名の發句を夫々合はせて百五拾番。判者季吟。

風鈴軒は奥州七萬石岩城藩主風虎内藤義泰(元和五年—貞享三年 一六一九—一六八六)學術を好み、兼ねて俳壇に眷顧を垂れる事甚だ多かつた。風虎、他に六百番俳諧發句合等類同のものあり、揆を一にするものか。従つて本書は季吟かの命を受けて撰したと見るべく、作者、奥州の風虎關係、及び京大阪季吟門の主要を盡してゐる。奥書、寛文九年三月三日 季吟(花押)。

寛文九年  
二月二日  
季吟

十二番  
九番  
小村湖春  
井稻女  
石指  
類  
二  
三  
四  
五  
六  
七  
八  
九  
十  
十一  
十二



八寶藏

元隣(寛永八年—寛文一二年)山岡氏、字は徳甫、而燼齋、洛陽散人、抱蕪齋、又玄水と號す。伊勢山田の人、京都に住す。俳諧を北村季吟に學び、國文の諸古典に註を加へ、假名草子作者としても知られる。

掲出本は袋綴、五卷五冊。縦二六・五糎、横一八糎。寛文十一年二月日自序に曰ふ、黄金はやんことなき物なれと其屑くずをたに眼にいれは三界くらし。やうし耳かきやうの物といへと身に隨ひ心を慰さましむる時は則寶也。これ此草子の始まれる所也略。即ち日常身邊の諸器物につき短文一篇を記し、各篇毎に發句、狂詩を附して、所々風俗畫的挿畫を入れる。いづれ假名草子の一體としてではあつたが、俳諧の文であり、個人の俳文集として最も早い。寛文辛亥二月中浣元恕跋。辛亥は一一年、元恕はその嫡。刊記、洛陽寺町書舎 秋田屋五郎兵衛。





九 諧 誦 獨吟一日千句

西鶴(寛永一九年—元祿六年)井原氏。延寶三年四月、西鶴妻病歿、享年二五。時に西鶴三四歳。その悲しみと追慕の情に堪へず、初七日にあたる四月八日、明くるより暮るゝまでに獨吟郭公千句をものしてその靈に手向けた。本書に記す所、彼等に三人の幼兒があつたといふ。菩提寺は大阪誓願寺、等從來殆ど知られなかつた西鶴の傳記に新しい光を投じた。一日獨吟千句の法としては半時に百韻。即ち千句十時間とすれば、しかも法要の當日にこれ程の熱情を示した事を如何に解釋すべきであらうか。

掲出本は袋綴、一冊。縦一三纏、横二〇纏、四七丁。獨吟千句に附して、師西山梅翁以下當時大阪在住著名の俳人より寄せられた追善發句一〇五句を併せ收める。以てその俳交の廣さを知り得よう。延寶三年卯ノ四月八日松風軒西鶴自序。千句の執筆及び本書板下の筆者は伊藤長右衛門道清。刊記、大坂阿波座堀 板本安兵衛。

239698

延寶三年卯ノ四月八日  
松風軒西鶴自序  
千句の執筆及び本書板下の筆者は伊藤長右衛門道清

獨吟一日千句  
延寶三年卯ノ四月八日  
伊藤長右衛門道清  
松風軒  
西鶴

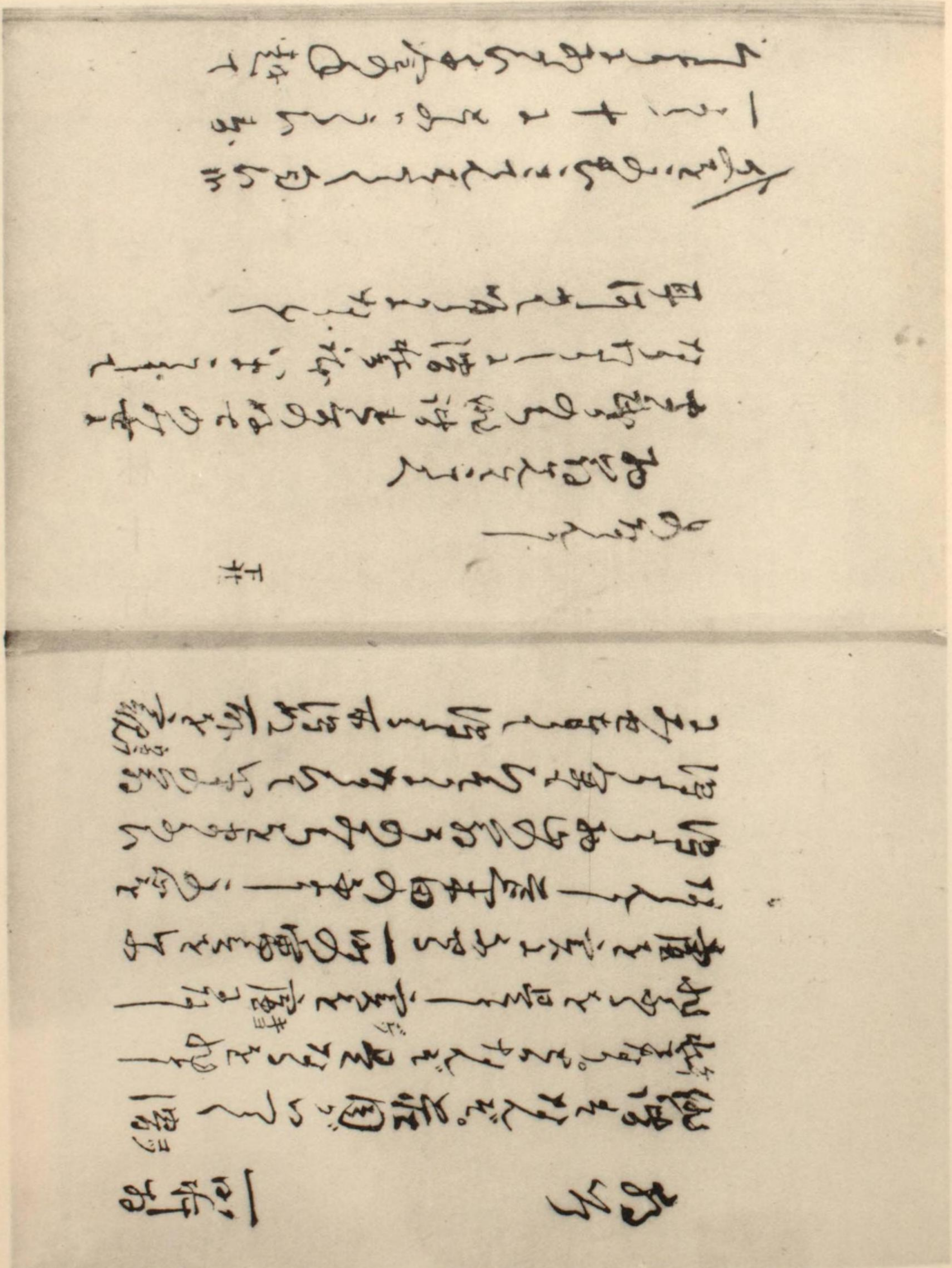


俳諧蒙求

守武  
西翁

流

惟中(寛永一六年—正徳元年  
一六三九—一七一)岡西氏、一時軒、閑々堂、又北水浪士と號す。その  
先は因州鳥取といひ、備前岡山に出で儒を業とす。笈を京に負ひ、烏丸資  
慶より歌學の傳を受け、俳諧を西山宗因に學ぶ。延寶の中頃大阪に移り、  
儒醫を以て立ち、傍ら俳諧の點者として宗因の跡目を以て自ら許した。俳  
諧は莊子が寓言なりとの本書の説は談林の俳論中最も體系あるものである。  
掲出本は袋綴、二冊。自筆板下。縦二二・五糎、横一六・五糎。西岸寺任  
口跋。刊記、延寶三年乙卯孟夏吉日 深江屋太郎兵衛板行。本書には初印  
本、訂正後印本の二種がある。





二 江戸俳諧 談林十百歌

松意、田代氏、談林軒と號す。江戸の住。神田鍛冶町に結社を起して俳諧談林と自稱し、延寶初中、江戸俳壇にあつて新興勢力としての座を占めたが、更に同末年所謂蕉風の興起につれて次第にその存在意義を失つた。前後概ね十ヶ年。

延寶三年春、西山宗因の東下を迎へ、連中と共に

されは爰に談林の木あり梅の花 西山氏 宗因

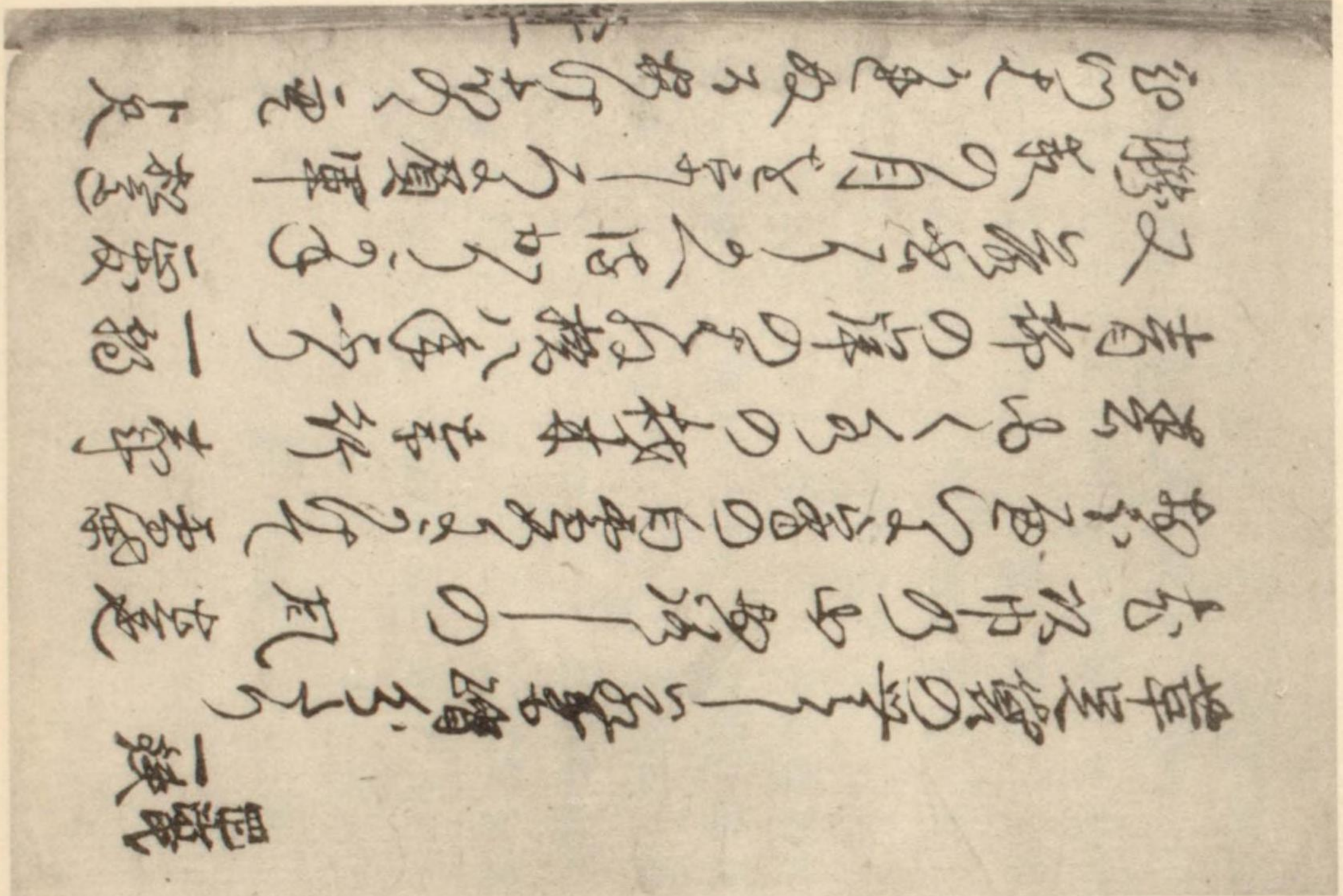
を發句として

世俗眠をさますうくひす

雪柴

に始まる協起百韻を興行し、他に九卷を併せて十百韻、本書を以て新風を世に問ふた。俳諧史上宗因一派を談林と稱するものもこれによる。

掲出本は袋綴、二冊。縦一九纏、横一四纏。序跋共に無記名、或は松意の筆といふ。刊記、延寶三卯十一月吉日。別に刊記を削つた後刷本もある。寫眞の革足袋の巻は下冊、第九卷にあたる。

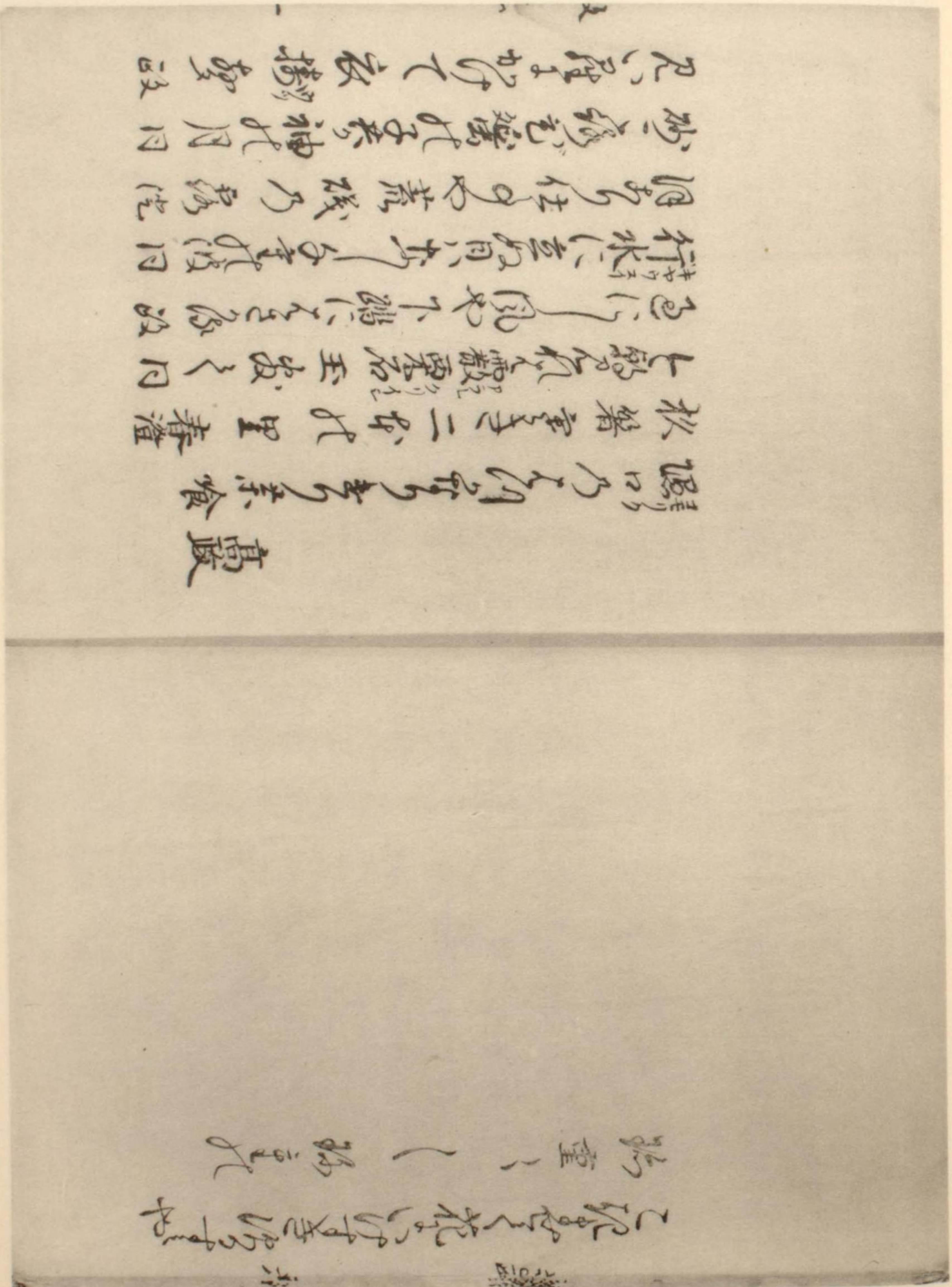




三 誹諧中庸姿

高政、菅谷氏。京都談林の驍將にして、誹諧惣本寺、伴傳連社と誇號し、江戸の談林軒松意、大阪の阿蘭陀西鶴に對して自ら任ずる所があつた。談林の躰とはいひながら、奇驕難澁の句風は特に彼に激しく、しかも正統中庸を以て書名を銜つたのである。中庸姿とはツネノスガタと訓む。誹諧惣本寺獨吟百韻外、一派の百韻一卷歌仙九卷を收め、延寶七年刊。本書出づるや貞門中島隨流は直ちに誹諧破邪顯正を著はして大いに論難し、俳壇に於ける論戰の緒を開いた。

掲出本は袋綴、一冊。縦二三纏、横一六・五纏、三九丁。無刊記。別に袋綴、一冊、縦一三・五纏、横二〇・五纏、延寶七年九月吉日 丸太町 松本茂兵衛板の刊記を有する横一本あり、當時の盛行を知る。寫眞は高政の「目にあやし麥葉一把飛螢」を發句とする獨吟百韻。揚句「珍重々々珍重の」とあつて句末の「春」一字を省く。後横本には之を補つてある。





三 諧 東 日 記

言水(慶安三年—享保七年  
一六五〇—一七二二)池西氏、紫藤軒、又洛下童と號す。南都の人。始め俳諧を松江維舟に學ぶといふ。後江戸に出で談林の風に從ひ、又蕉風に近づく。京都に終る。

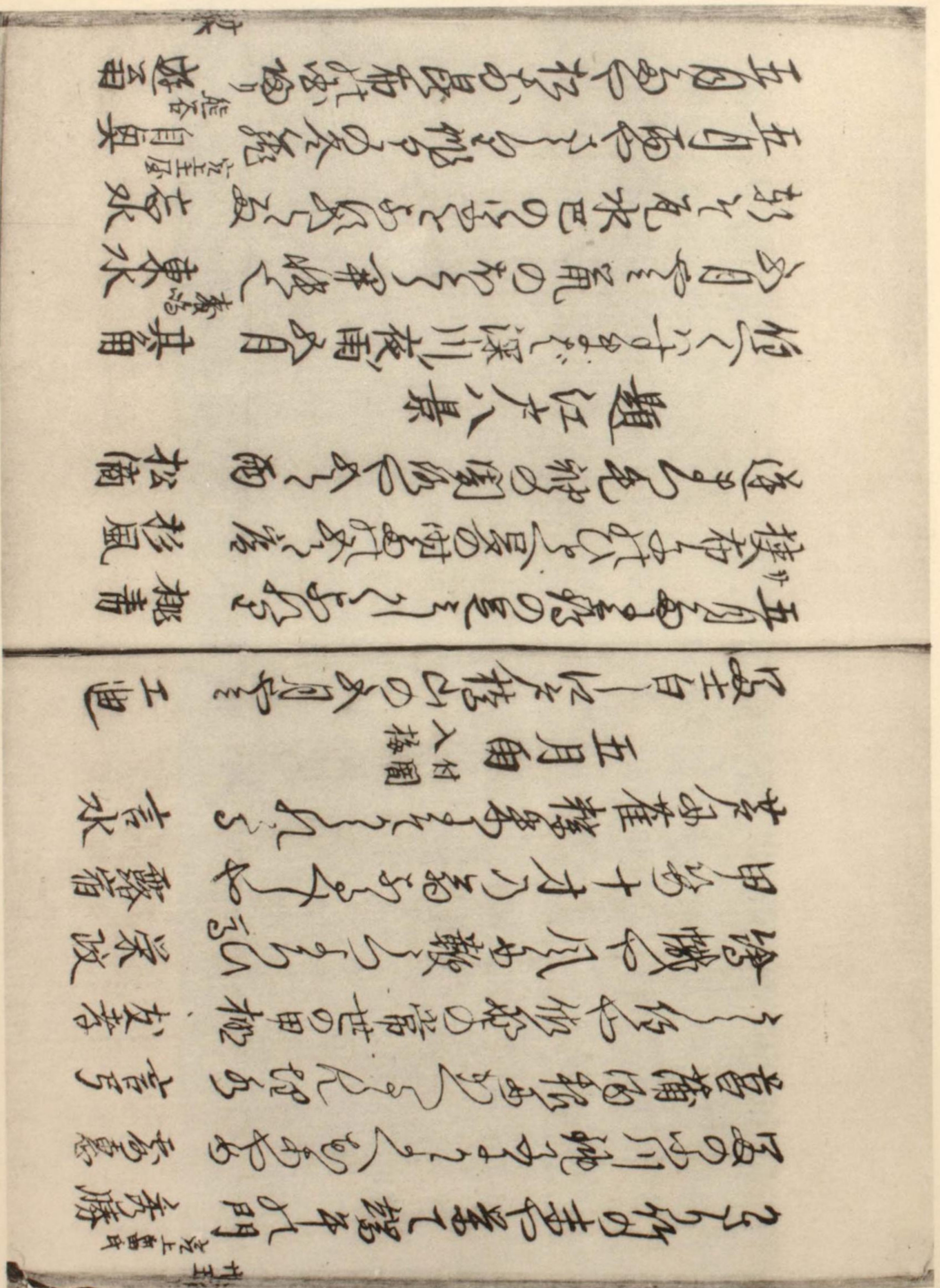
江戸は俳諧の事情上方程に錯綜せず、延寶末年、舊來の談林に對して新風興起の兆があり、言水もその有力なる一人であつた。本書は彼が江戸在住に於ける集で、加入の作家概ねその地に限られてゐる。談林の臭味未だ必ずしも脱したりとはせぬが、既に新鮮の興趣は十分に感得し得る。かの蕉風開眼の發句

枯枝に鳥のとまりたるや秋の暮

桃青

は實に本書に初見した。

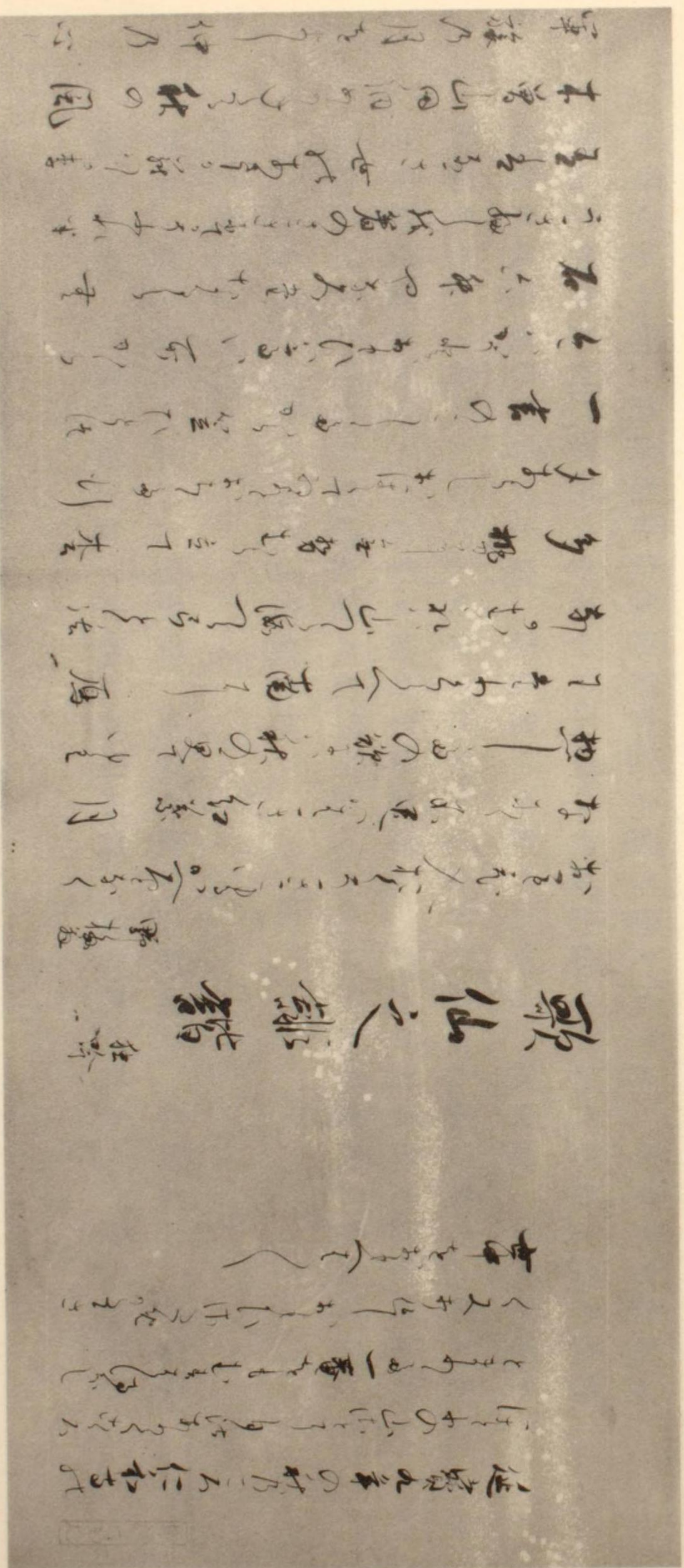
掲出本は袋綴、乾坤二冊。乾卷發句、坤卷歌仙。縦一九纏、横一四纏。板下筆耕寶井其角。延寶九夏月日。纂特小僧才麿序。奥書、于時延寶九酉歲林鐘中旬 紫藤軒言水編。





四 梅翁歌仙之誹諧

宗因(慶長一〇年—天和二年  
一六〇五—一六八二)西山氏、豊一。梅翁、野梅子等諸號あり。肥後八代  
城主風庵加藤正方家臣。夙く連歌を京都里村昌琢に受け、後大阪天満社連  
歌所の宗匠に任ず。併せて俳諧に親しみ、松江維舟に兄事したといふ。洒  
脱輕妙の詠み口を以て談林の總帥と目され、その門より西鶴をはじめ多數  
の俊秀を出した。晩年は談林の放逸に倦んで俳事に遠ざかるとの説もある。  
掲出本は自筆。卷子本、一卷。縦三一・五糎、長丈二米餘。延寶九年秋の  
歌仙之誹諧獨吟一卷、及び連歌四季發句、誹諧四季發句を併記。奥書、或  
人依所望染禿筆 天和元年仲冬 行年七十六 忘吾菴梅翁子(印)。即ち最  
晩年の筆蹟である。





三 俳諧百韻繪卷

西鶴自畫、自筆。卷子本、一卷。縦三五糎、長丈約十數米。用紙、厚手の間合、裏面雲母引き。古裂表紙、見返布目押模様金紙。卷軸象牙。絢爛豪華の装幀である。

日本道に山路つもれば千代の菊

を發句とする自作の俳諧百韻に自註を加へ、所々句意に相應の繪を挿む。句風談林調を骨子として稍々蕉風の氣味あり、註の文章は彼が浮世草子の風韻をたゞよはせてゐる。文字の運筆その平常に比して謹嚴細心、繪は概ね當時風俗畫の態にならひ、極彩綿密を盡してゐる。當百韻、曾て元祿七年南紀熊野本宮の社家小中南水・玉置安之撰熊野からすにその一部が採録された事あり、元祿五年秋熊野路行脚の際の作かといふ。しかもかの地に傳來のものであつた。



を發句とする自作の俳諧百韻に自註を加へ、所々句意に相應の繪を挿む。  
 句風談林調を骨子として稍々蕉風の氣味あり、註の文章は彼が浮世草子の  
 風韻をたゞよはせてゐる。文字の運筆その平常に比して謹嚴細心、繪は概  
 ね當時風俗畫の態にならひ、極彩綿密を盡してゐる。當百韻、曾て元祿七  
 年南紀熊野本宮の社家小中南水・玉置安之撰熊野からすにその一部が採録  
 された事あり、元祿五年秋熊野路行脚の際の作かといふ。しかもかの地に  
 傳來のものであつた。





In the Tenri Central Library there is a special Library called Wataya Bunko, which is eminent for its collection of Renga, Haikai and Zappai in Japan. We have chosen here from the collection some 15 Haikai books and manuscripts before Genroku-Era (1536—1692) which are important in the history of Japanese literature.



善本寫真集

(TENRI CENTRAL LIBRARY PHOTO SERIES)

- I 日本近世名家自筆集 (Autographic documents of Edo-period in Japanese literature) 昭和28
- II きりしたん版 (The Jesuit Mission Press in Japan) 昭和28
- III 古俳書 (Kohaisho 1—Materials of early Haikai—) 昭和29
- IV 西洋古版日本地圖集 (Early printed maps and atlases of Japan made in Western countries) 昭和29



昭和二十九年六月十日印刷  
昭和二十九年六月十五日発行

編輯者 奈良県天理市内一〇五〇  
天理図書館

印刷者 京都市中京区新町通竹屋町下ル  
天理株式会社 便利堂

発行者 奈良県天理市  
天理大学出版部

TENRI CENTRAL LIBRARY PHOTO SERIES III

Contents

- 1 Shinsen Inutsukuba-shū. Yamasaki Sōkan.
- 2 Moritake Senku Sōan. Arakida Moritake.  
Original manuscripts of A. Moritake's "One thousand Haikai".
- 3 Enoko-shū. Matsue Shigeyori.
- 4 Iseyamada Haikai-shū. Risei, Moichi, Kōsei.  
Collected Haikai of Yamada in Ise Province, explained and annotated.
- 5 Haikai Gosan. Matsunaga Teitoku.  
Codes for Haikai literature.
- 6 Ryūho Haikai Emaki. Nonoguchi Ryūho.  
Ryūho's Haikai, illustrated with pictures.
- 7 Hyaku-gojū-ban Haikai Hokku Awase. Kitamura Kigin.  
Collection of one hundred fifty Pairs of Hokku, compared and explained.
- 8 Takara Gura. Yamaoka Genrin.
- 9 Haikai Dokugin Ichinichi Senku. Ihara Saikaku.  
One thousand Haikai made by I. Saikaku in a day.
- 10 Haikai Mōgyū. Okanishi Ichū.  
Essay on Haikai literature.
- 11 Edo Haikai Danrin Toppyaku-in. Tashiro Shōi.  
Ten collections of "Hundred Haikai" from the Danrin School in Edo.
- 12 Haikai Tsuneno Sugata. Suganoya Takamasa.  
Collection of Haikai in new Era.
- 13 Haikai Azuma Nikki. Ikenishi Gonsui.
- 14 Bai-Ō Kasen no Haikai. Nishiyama Sōin.  
36 representative Haikai and miscellaneous.
- 15 Haikai Hyaku-in Emaki. Ihara Saikaku.  
Roll of Haikai, illustrated with pictures.



